The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オスカー・ワイルド研究 ： 「芸術における嘘の問題」
Author(s)	山田, 勝
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 94-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25795
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オスカー・ワイルド研究
「芸術における嘘の問題」

山　田　　勝

The Decay of Lying についてワイルドは "It is meant to bewilder the masses by its fantastic form; au fond it is of course serious." (Let., p. 236, To Violet Fane) "...: the public so soon vulgarise any artistic idea that one gives them that I was determined to put my new views on art, and particularly on the relations of art and history, in a form that they could not understand, but that would be understood by the few who, like yourself, have a quick artistic instinct." (Let., p. 236, To W. H. Pollock) と述べている．戯曲においても小説においても常軌を逸した言葉によって大衆を翻弄するのが彼の趣味でもあるから芸術論においてこのような意図を持つのは当然であろう．しかし，いかに人を bewilder することが趣味の問題であっても無意味になしているわけではない．芸術上の真を表明するには，大衆にとって理解出来ない形にならざるを得ないと彼は考えるのである．この考えはかならずしも正しいとは言えないが，当時の文学的背景と大衆の好みを考慮すれば一応うなずけるのである．当時の文学の流れは審美主義運動が起っていたとは云え "Let us return to Life and Nature" の気風がやはり強かった．生活に密着した文学，言い換えれば，人生に起る様々な事件を写実的に描写したような文学が大衆に受けていたのである．大衆はその芸術的価値とは無関係に，ただわかり易いとか，生活上の経験から共感を覚えるというだけで文学作品を評価してしまうのである．[1] 逆に云えば芸術とは象徴的なものであらねばならない[2] から，簡単に生活上の共感を覚え

られるような作品は芸術的には低級なもの，すなわち，大衆が当惑しないようなものは価値のないものということになる．従って「大衆がわからないような形」で書くことがある意味において「誤った」文学の流れを正しいそれに変えようとする意図を象徴していると同時に既成の文学思想でのデモンストレーションともなると考えたからであろう．*The Decay of Lying* という題名も現実生活に妥協し，真の芸術的世界から遊離してしまった当時の文学界への皮肉なのである．それでは最初に自然と芸術の関係を彼はどう考えていたかという問題に触れよう．

一般に自然は芸術にとって欠くことの出来ないものであり，自然こそ芸術の完全な姿であるかのように考えられてきた.[3] しかし実は自然というものは design の欠如も甚しく，極度に単調で，未完成な状態なのである．自然とはバラエティーに富み，神話的だとする考えは自然自身がそうなのではなく，それを見る人のイマジネーションやファンシーに依存するのである.[4] ワーズワースの作品は自然に接した時にできたのではなく，彼が詩そのものに戻った時に生まれたのである.[5] このようにワイルドはこれまで芸術そのものと密接な関係を持ち，芸術の理想の形と思われてきた自然を別の尺度から眺めようとした．先にも述べたとうり *The Decay of Lying* は人を唖然とさせるのも目的の一つであったから，彼の自然観を極端なものに向けていく．すなわち，いわゆる自然というのは何ら意味を持たず，芸術の理想の形などと崇めるのは甚だおかしい，自然とは芸術の後にできたものだという．ここでいう『自然』とは俗人の目に映るだけの地質学的等の自然を意味するのではなく，芸術として成り立つ真の『自然』である．この『自然』こそ芸術をとうして生まれたものだ．例えば『霧』一つを例にとって見ても，現在英国人が感じている霧の神秘的な美は詩人や画家たちが教えたのであって，彼等が創造するまではその考を認識しなかった．つまり『霧』は存在しなかったということになる．従ってこの『霧』（自然）は芸術の後に生じたと云えるのである．このワイルドの考

えを拡大して行けば霧のような自然物に限らず，人間の personal beauty についても同様のことが言えるであろう．そのよい例は *The Picture of Dorian Gray* である．若いドリアンは生来の美男子であるが画家バジルやヘンリー卿（貴族であるから職業を持たないが純然たる芸術家と云える）に教えられ，始めて己れの美を認識する．いわば，自分の存在に気づいたわけだ．又，ドリアンのような美青年とはちがって，通常の観念からすれば不気味でグロテスクなものでも芸術家は美的なものとしてしまい，我々もその美を納得する．それは明かに芸術が自然に先行したことを示すであろう．例えばサロメが美的と呼んだヨカナンの青白い死者のような顔も，彼の首に接吻する彼女の姿も新しい美の創造と云えよう．これもやはり一種の存在の認識なのである．こういったワイルドの『芸術は自然を先行する』という考えは，存在の認識とは美にあるという説を是認すれば，全く正しいと云ってよい．このようなワイルドの自然観は経験だけに頼って何ら creat しない文学界，伝記の如きものを芸術と心得えている時代への挑戦ラッパなのである（I have blown my trumpet against the gate of dullness).[6] 『ドリアングレイの画像』においてバジルがこれを代弁している．

> We live in an age when men treat art as if it were meant to be a form of autobiography. We have lost the abstract sense of beauty. Someday I will show the world what it is; ...[7]

ここで実生活上の経験が果してどれだけ芸術に関係を持つことができるかという問題が生じてくる．結論を先に言えば実生活も，自然の場合と同様芸術の影響を受けるというのである．芸術とは実生活の経験から生み出すというような低級なものではなく，空想された芸術上の世界が逆に人間の生活に影響を及ぼす．何故なら人間には模倣本能があるからだ．これを説明する為にワイルドは次のような卑近な例を挙げている．

Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* が出版されて間もなくのこ

とである．ワイルドの友人で Hyde という名前の人（彼はこの小説を読んでいる）がロンドンで汽車の時間に間に合わせようとして，近道を急いでいた．ところが道に迷って汚たならしい所に出たのである．あせりながら走っている時突然拱道から子供が飛出してきて，彼の足もとで倒れた．ハイド氏はこの子供を踏みにじってしまった．子供が泣き叫ぶので近所から大勢の人々が集まってきて，彼を取り囲み，彼の名前を問い糺した．彼は小説の冒頭の部を想い出して，恐しくなって名前は出さなかったとのことである．[8] この話しは事実としても偶然の一致かもしれないから，ワイルドの芸術論に適用する訳にはいかないという懸念がある．そこで彼は次のような例を用いる．

彼がオクスフォードを出て間もなく，あるパーティーですばらしい女性と知り合った．彼女の魅力は美しさではなく，その性格にあった．彼女には特別の個性というものはなく，どのようなタイプにもなれる可能性を秘めていた．彼女はギャンブルが好きでもあった．ある日フランスの雑誌に一つの物語が掲載されたが，そのヒロインは彼女と著しく類似しているのである．（この物語はすでに死んでいるロシア作家の作品の翻訳であるから，彼女をモデルにしてヒロインをつくったということは絶体にない）雑誌の号が進むにつれて話しも進展し，ヒロインはくだらない男とかけ落ちした．ところがしばらくしてワイルドの知りあった例の女性も同じことをしたのである．後で彼女がワイルドに打ち明けたところによると，その物語を読んでいくにつれて次第にヒロインの後を追いたい衝動に駆られ，最後の数章を待っている時はすさまじい恐怖に襲われ，ついにヒロインの一生を再現してしまったというのである．[9] このエピソードは前者のように偶然の一致ではなく，明らかに芸術の世界が一人の人間に心理的影響を与え，芸術の世界を実際の人生に再現させたのである．

以上の実例は余りにも個人的な問題に限定されたが，芸術と人生の関係は一般的に次のようなことが云える．つまり人生の根本は表現を求めるこ

とにある．そして芸術は成し得る限りの種々の表現形式を提供する.[10] 人生はそれらを促え，利用する．『若きヴエルテルの悩み』を読んだ若者が大勢自殺したのも，人生における表現を模倣したからである．リアリズムへの反撥からワイルドは芸術の本質をもっと独自なものと考えようとしたのである．

Art never expresses anything but itself. It has an independent life, just as Thought has, and develops purely on its own lives.[11]

そしてその芸術の本質こそ美であり，facts を離れた美を生みだすことがその目的であると言う．従って嘘でもよいから美的なもの，象徴的なものを創造することが芸術の理想とした．そこで，嘘と芸術の問題が生じる．ワイルドは当代文学が平凡になった原因の一つとして芸術・科学・社会享楽に嘘が衰退したことを挙げる．

One of the chief causes that can be assigned for the curiously commonplace character of most of the literature of our age is undoubtedly the decay of Lying as an art, a science, and a social pleasure. The ancient historians gave us delightful fiction in the form of fact; the modern novelist presents us with dull facts under the guise of fiction.[12]

と云っても社会生活や時代精神と全く無関係に芸術活動を行うべきであるというのではない．文学は時代精神と大いに関係を持つが，当代のリアリズム文学のようにただ具体的に描写するのではなんら時代精神を表わすことにはならない．もっと抽象的であらねばならない．芸術がより抽象的で観念的であればあるほど時代の気質をよりよく表明する（The more abstract, the more ideal an artist the more it reveals to us the temper of its age.[13]）と云う．日本の浮世絵は日本人のありのままの姿を描いていないし，ギリシャ彫刻はギリシャ人のありし日の姿を表わしているわけではない．事実とは全くかけはなれている．しかしそこに一つの精神を抽

象的に現わしている．ワイルドが Fairy Tales を多く書いたのは社会性を抽象化するという意図があったのではないだろうか．*Happy Prince* その他の物語はもちろん子供をよろこばせるために書かれたであろうが，Fairy Tales を手がける動機はやはり今述べた彼の芸術観と深いつながりを持つのである．次の手紙二篇はそれを実証してくれる．

> The story (Happy Prince) is an attempt to treat a tragic modern problem in a form that aims at delicacy and imaginative treatment: it is a reaction against the purely imitative character of modern art ——....
>
> —— Let., p. 221, To Leonard Smithers ——
>
> Dear Mrs Chanler, I send you my fairy tales and a copy of the Nineteenth Century. The former are an attempt to mirror modern life in a form remote from reality -- to deal with modern problems in a mode that is ideal and not imitative: ....
>
> —— Let., p. 237, To Amelie Rives Chanler ——

つまり現代の社会問題を模倣的ではなく観会的に，現実と遊離した形式でとりあげているのである．*The Canterville Ghost* においても英国人と米国人の考え方の相違を幽霊物語という非現実的な手法で表わしている．こういった形式や手法をワイルドは「嘘」と呼ぶ．そして嘘（美しい非現実的なことを言うこと）こそ芸術の目的である（Lying, the telling of beautiful untrue things, is the proper aim of Art.[19]）という．この *The Decay of Lying* でワイルドが言う『嘘』とは芸術の純粋性を意味しているのであるが，別な意味における『嘘』もやはり重視している．すなわち嘘と秘密の問題だ．人間生活において秘密やミステリーは非常な魅力を持つ．平凡で退屈なものを嫌い神秘と魅力を求めたワイルドにとってミステリーこそ捨てがたい魅力なのだ（Nowadays, we have so few mysteries left to us that we cannot afford to part with one of

them.[15]). しかし人間の生活とは大低平凡なものであるから，それを少して魅力的にするためには自分の本性，すなわち，事実をつかませないことだ.[16] そのためには何か秘密があるかのような嘘をつく必要がある．そうすればその人の生活そのものが嘘（creat したもの）すなわち芸術的で魅力のあるものとなる．人生を芸術に従属させたワイルドにとって人生そのものを自然ではなく人工的（芸術的）にしようとしたのは当然である．この考えは彼の短篇に見出されると思う．例えば *The Sphinx without a Secret* である．これは本当は非常に単調で何の秘密もない生活をおくっている婦人が他人から mysterious に思ってもらうとした話しで，人に気づかれたら大変というような態度で黄色の馬車に乗り，街中のある下宿屋の一室を意味ありげに訪れ，秘かに誰かに会ったかのような振りをして帰っていく．そしてこの行動が毎日続く．この婦人の行動に興味を抱いたある男が調査してみると毎日，訪れるあの下宿で誰と会うでもなく，ただ椅子にすわってお茶を飲んで帰るだけだったのである．

平凡な生活でも演出することによって mystery を生み，魅力が生じるのである．主人公が惹かれたのはまさにその婦人の mysterious beauty であった．

> Its beauty was a beauty moulded out of many mysteries —— the beauty, in fact, which is psychological, not plastic —— and the faint smile that just played across the lips was far too subtle to be really sweet.
>
> —— Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories (Methuen), p. 123 ——

又，同系列の短篇 *The Model Millionaire* も大金持が乞食に紛していた話しであるし，ワイルドの戯曲，例えば *Lady Windermere's Fan* や *Importance of Being Earnest* や *The Ideal Husband* なども生活における秘密が戯曲進行の鍵となっていることも見逃せない事実である．人生

も芸術的であらねばならないと考えるワイルドは彼自身の生活においても劇的な演出を試み[17]『人生は芸術を模倣する』という立場から，自己の創造した芸術の世界を実生活に再現しようと企てたことも認める．特にワイルドのようなデカダンの作家は，よく言われることであるが，Pater の *The Renaissance* 結語の影響を多分に受けている．すなわち『我々人間すべて死の宣告を受けている』[18] のであるから人間性を密着しない哲学や形而上学は全く無意味である．無常の人生を効果的にするためには，瞬間の中に永遠性 —— great passions[19] —— を求めるべきだ．瞬間における永遠とは『愛の恍惚と非哀』(ecstasy and sorrow of love[20]) や『さまざまな形式の情熱的活動』(various forms of enthusiastic activity[21]) であるかもしれない．ワイルドはこれを美に求めたが，終局的にはペイターの考えとは変らない．何故ならワイルドにとっては芸術的な『美』が great passions すなわち人生における永遠性を感じさせてくれるものであるから．しかし時代性や本人の性質や芸術論の極端さからワイルドはペイターよりもこの考えを一層生活に結びつける．先にも述べたとうり，人生は芸術を模倣するものであるから人生をも芸術的に，云い換えれば，美的につくり変え，そこに passions を求めていったのである．人生こそ最大の various forms of enthusiastic activity であるからだ．

ワイルドの生活は恐らくはじめはすべて芸術的なものを意識的に行っていたのであろう．しかし，それが次第に本性に侵透して同化したのである．彼の作品よりもはるかにすばらしかったと言われる会話術，友人や見知らぬ人との間に生じた数々のウィットに富んだエピソード．これらすべては人生と人生の対話を芸術的にドラマテックにしようとする意識と才能が結びついて，それが次第に個性化したのである．彼の破滅の原因となった同性愛問題もこのような意識が重要な要素になったと考えられる．[22]

芸術上の嘘，それにともなう人生の嘘，これを実行したワイルドこそ真の芸術家であり，芸術のために生きた男と言える．しかし彼自身全盛時代

に述べているとうり芸術的な生活とは『長く美しい自殺』なのであった.

Sometimes I think that the artistic life is a long and lovely suicide, and am not sorry that it is so.

—— Let., pp. 184—5, To H. C. Marillier ——

センセイショナルなものや新しい経験，いわゆる nouveau frisson[28] を求めて陥ちこんだ奈落の底は正に自殺とも云えるものであった．彼は自ら創造した芸術品であるドリアン・グレイの手によって殺された画家バジル・ホールワードでもあれば，芸術のために死を選んだ Cyril Graham[29] でもある．芸術家の破滅の問題を自己の芸術の世界で創造したのであるが，それが後になって実現したのである．文字どうり人生は芸術を模倣したのだ．『獄中記』の中で彼は快楽に身を任せる者の破滅を予告するような言葉を全盛時代の作品中に何度か述べた．*Happy Prince*, *The Young King*, *The Picture of Dorian Gray* において然りである．しかしその時は私にとってはそれらはただの言葉にすぎないと思っていた．しかしその中に大きな予告があったのだ．だが私は快楽を追求した自分を瞬間と云えども後悔していないという意味のことを云っている.[30] 芸術と快楽に耽れて破滅した彼の一生は不幸であったかもしれない．しかし本人は満足していたかもしれない．芸術と人生における理想と信念を貫いたのであるから．

Notes

1 Essays by Oscar Wilde (Methuen) p. 44
2 Ibid., p. 64
3 Ibid., p. 35
4 Ibid., p. 61
5 Ibid., p. 47
6 The Letters of Oscar Wilde (Rupert Hart-Davis), p. 237, To

Kate Terry

7 The Picture of Dorian Gray (Everyman), p. 79

8 Essays by Oscar Wilde, pp. 57—58

9 Ibid., pp. 58—60

10 Ibid., p. 60

11 Ibid., p. 70

12 Ibid., pp. 36—37

13 Ibid., p. 64

14 Ibid., p. 72

15 The Critic as Artist (Everyman), p. 6

16 Lady Windermere's Fan (Everyman), p. 296

17 Arthur Symons は A Study of Oscar Wilde (London, 1930), pp. 84—85 で "One sees that to him everything was drama, all the rest of the world and himself as well; himself indeed always at once the protagonist and the lonely king watching the play in the theatre emptied for his pleasure." と述べている.

18 Walter Pater, The Renaissance, Conclusion

19 Ibid.

20 Ibid.

21 Ibid.

22 松蔭女子学院松蔭短期大学研究紀要第九号においてオスカー・ワイルドの同性愛問題を考察した

23 The Letters of Oscar Wilde, p. 275

24 The Portrait of Mr. W. H. 中の人物

25 The Letters of Oscar Wilde, p. 475

参 考 書 目

Oscar Wilde, by Frank Harris (Dell, 1921)

British Drama, by Allardyce Nicoll (George G. Harrap, 1925)

Oscar Wilde: A Summing Up, by Lord Alfred Douglas (Pall Mall, 1940)

The Pre-Raphaelite Tragedy, by William Gaunt (Cox & Wyman, 1942)
The Romantic Imagination, by C. M. Bowra (Oxford, 1950)
The Life of Oscar Wilde, by Hesketh Pearson (Methuen, 1954)
The English Novel, by Walter Allen (Phoenix House, 1954)
Oscar Wilde, by Vyvyan Holland (Thames and Hudson, 1960)
Wit and Wisdom of Oscar Wilde, collected by Cecil Hewetson (Duckworth, 1960)
The Letters of Oscar Wilde, edited by Rupert Hart-Davis (Rupert Hart-Davis, 1962)
Oscar Wilde: the aftermath, by H. Montgomery Hyde (Methuen, 1963)
English Comedy, by Ashley H. Thorndike (Cooper Square Publishers, 1965)
Introduction to Modernity, by Robert Mollenaur (University of Texas, 1965)
Dark Passages, by Barbara Charlesworth (Madison and Milwankee, 1965)
The Art of Oscar Wilde, by Epifanio San Juan Jr. (Princeton University, 1967)

使用テキスト

Oscar Wilde: Plays, Prose Writings And Poems (Everyman)
Complete Plays by Oscar Wilde (Collins)
Lord Arthur Savile's Crime (Methuen)
Essays by Oscar Wilde (Methuen)
Wilde, Importance of Being Earnest, Etc (研究社)